

ごあいさつ

楼門保存修理工事竣功祭を終えて

阿蘇神社宮司 阿蘇 惟邑

平成28年4月、2度にわたり震度7の大きな揺れが熊本県を襲い、この地震で多くの方々が被災され、大変な思いをされました。当神社においては拝殿と楼門が全壊するなど、境内全体が甚大な被害を受けました。地震直後は現実と思えぬ光景に、心が折れそうになることもございましたが、多くの皆様から温かいお言葉を頂戴し、励ましを受け、そして多くのご支援と、関係各位のご協力をいただきながら災害復旧を進めてまいりました。熊本地震から約7年8ヶ月、このたび楼門の保存修理工事の竣工をもって主要な社殿の復旧と再建が完了いたしました。

最後まで復旧対象となっていました阿蘇神社の楼門は、嘉永3年（1850）に完成して以来、数多くの参拝者を迎え、阿蘇神社の顔として広く親しまれてまいりました。荘厳で凛とした佇まいは、多くの方から阿蘇地域のシンボルと評されてきました。楼門をはじめとする現在の阿蘇神社の社殿群は、江戸時代末期に熊本藩挙げての造営事業で形づくられたものです。つまりそれは、当時の人々の思いが込められた象徴ともいえます。このたびの復旧復興への取り組みとは、こうした歴史を次世代に守り伝えるため、元の姿に戻す、私たちの大切な使命でありました。

当時造営された社殿6棟は、現在、国の重要文化財に指定されていますが、その修理にあたっては、価値を損ねないように、できるだけ元の部材を使うことが求められました。なかでも全壊した楼門の修理は想像を超える難工事でした。膨大な部材の一つ一つに番号をふりながら、分解し、回収し、地震前の写真と照らし合わせながら、どの場所にどの部材があったかを確認し、部材を一つ一つ繕いながら組み立てる、気の遠くなる作業を関係者の方々には丁寧に進めていただきました。お蔭をもちまして、解体した部材の約7割を再利用することができました。

また楼門の修理工事では、建造物の伝統的工法を大切にしつつも、耐震補強のために新しい技術を取り入れる試みもありました。前例にない難工事を進めていただいた関係各位には、心より敬意を表します。

こうした復旧復興の取り組みは、次世代に神社を守り伝えていくため、私たちの研鑽の場にもなりました。外に目を向ければ、皆様の目に被災した阿蘇神社の姿がどのように映ったのか、これまで阿蘇神社がどのように捉えられていたのか等、ご支援を介して知ることができました。内に目を向ければ、地震で損なわれた環境で、どのように年中行事を執行させるのか等、長い期間をかけて神社の役割を見つめ直すことになりました。こうした経験を活かし、神社を後世にしっかりと守り伝えてまいりたいと思っております。

見事に復旧を遂げました楼門を見上げますと、さまざまな思いが込み上げてまいります。多くの方々の力強いお支え、ご尽力があったからこそ、このたびの復旧復興を成し遂げることができました。これまで数々のお心遣い、励ましのお言葉、ご支援を賜りました全ての皆様に、ここに厚く御礼申し上げます。

令和5年12月7日